

主筆 江原萬里

# 聖書の眞理

第十六號

十一月號

昭和三年二月十六日第三種郵便物認可(毎月一日一回發行)

我が祈 癒す能力

最上の賜物 主

イエス・キリスト 江原萬里 筆

誘惑

魔法を信ぜず 江原萬里

エレミヤ記の研究 江原萬里

エレミヤの悲哀

造船學より見たるノアの方舟

山楨儀市

受難週間の研究 小栗襄三

アブラハムの信仰 石川仲伊

柏木通信 齋藤宗次郎

神と自衛權、身邊漫筆

昭和七年十一月一日發行

## 神と自衛權

世界の注目を鐘めて、リットン卿を委員長とする國際聯盟の滿洲問題調査報告書は發表された。我が外務省の譯文を讀むに、大體公平なる觀察との印象を受けた。私自身想像して居たものと合致するところ尠ならず、又實情について知り度いと願つた事項について多く歎えられた。但し、問題の解決は容易でないと思つた。

我が國の輿論は此の報告書に對して甚だ不滿である。その第一は滿洲に於ける我が權益の認識不足、第二は昨年九月十八日の事變勃發以來の我が行動は自衛權の範圍を越すとの意見、第三は滿洲國の建設は滿蒙三千万の自由意志に由るにあらず、我が國少數の軍人と文官とに由つたとの見解之である。

滿洲に於ける我が權益は日露戦役に多大の犠牲を拂つて獲得したものである。而して支那も亦此の戰爭で滿洲の主權を確保した。然るに今支那が滿洲から日本の勢力を驅逐しやうとしたから此の事變が起つたのである。最近支那の排日は益々悪性となつて來た。東洋の平和のため痛嘆に堪えない。されど支那をしてかくまで強烈に排日を遂行さすには、我が國は何の責任もないか。日露戰爭は果して東洋の平和を促進したか。我が國に凡てを與へ、何物をも失はしめなかつたか。日本人をして正義よりも武力に頼るものとさせなかつたか。その結果として排日は起らなかつたか。

第二の九月十八日事件、及び第三の滿洲建國事情については、新聞の報導以外何の知るところなき私は何とも云ひ兼ねる。若し不幸

にして此の報告書の意見が正しく、其の報告が眞實であつたならば日本は不當に武力を行使して他國の領土を侵し、之を強奪して、勝手に一國家を造つた事になる。これこそ我が國建國以來の大問題である。朝野の議論が沸騰したのは尤である。

一體何が日本を驅つて此の事件を起させ、之が世界の大小國の大問題となり、聯盟調査委員の派遣とな、而して最も公平であらうことを期する彼等をしてかやうな報告書を書かせ、世界の人々に日本は不正不義との印象を與へしめたか。そも又、日本が飽くまで自己の主張を貫徹しやうとし、之がためには聯盟脱退、世界的排斥、否、戰爭さへも避けない覺悟をせしめるのは何故か。是れ、滿洲は「我が生命線」とするからである。狹隘なる島國、過剩の人口、疲弊した農村、極度の不景氣、支那の混亂と排日とに因る貿易の不振此等を前にして今後日本人はどうして生活するか。之から滿洲事變は起つたのである。

若し國家以上に正義なるものは存在せず、國家が最高の道徳であるならば、滿洲に於ける我が國の行動は正當である。それは疑もなく「自衛權の行使」である。神の存在を認めない現代の世界は之に對して一指を染めることを許さない。只問題は國家以上の正義が支配して居るか否か、神は宇宙の統御者であり給ふか否かである。然り、若し神にして存在し給はんか、神はその存在を現實に示し給ふであらう。心せよ。支那にまれ、日本にまれ、米露にまれ、神を恐れざる者は。

# 聖書之眞理

第六十一號

昭和七年十一月一日發行

## 我が祈

我が祈は、心の中に言ひ難い惱を以て神を求めつゝある人々の上に聖靈が降下し、暗黒に光明を死に生命を、無智に智慧を與へ、人をして言ひ知れぬ平安を湛えしめ、歡喜と感謝に満たしめ、愛に溢れしめ、かくて不治の病に呻吟する者は周圍の陰鬱を拂つて病床をして花園たらしめ、生活の不安に悩むで絶望せる者は再起の力を得て、奮然新らしき道を開拓し、人皆己が利益と享樂と權勢とのために汲々たることをやめ、隣人を愛し、社會のために働く者とならんことである。

## 癒す能力

イエスは多くの難病を癒し給ふた。その能力は父なる神に對する全幅の信頼と、惱める者に對する心からなる同情に由つて得給ふた。若し我等が此のイエスを信する時は、其の信仰に由り、人の病を癒すことが出来る。聖書には澤山其の實例が録されてゐる。此の能力は一に信仰、二に惱める者に對する無私の愛に由り賦與される。

世には人を癒す特別の能力を有する者がある。その者が醫學上の最新知識を有すると有しないと全く關係がない。醫學博士必ずしも之を有せず何の學歴もない町醫に之がある。キリストを常に信じ、その生命に與つた者、彼の愛に感じ、彼の御靈を受けた者、かゝる者に不思議な癒しの能力がある。

然り、かゝる者の有する能力は、只肉體の疾患を癒すだけに留まらない。その靈魂の疾患をも癒す。憂鬱、焦慮、自暴自棄、人を恨み憎む心、世を呪ひ、凡てに失望、之等の病氣を取去り、其の者の心の眞底に平安と、そこから湧き出る歡喜を與へる。

## 最上の賜物

人は物を得れば喜び、靈的の賜物に對してはさ程喜ばない。その感謝の念は甚だ薄い。然し乍ら眞に價値あるものは物ではない。假令身飢ゆとも尙それ以上に尊いものがある。それがあつた時飢の憂を克服し、種々の苦難に勝ち得る。かゝる物を得た時人間は眞に人間として幸福である。かゝる者を與ふる者にこそ眞に感謝はある。

金を與ふるよりも職業を與へる方が善い。職業よりも自力更生の能力を與へる方が善い。能力よ

りもキリストを知らせる方更に善い。人キリストを知つて、永遠の光輝其の内から發する。

## インチキとギヤング

現時都下の新聞紙に奇妙な外國語若しくは外國語擬ひの日本語が使用される。その第一はエロ、之は少し古びた。第二はインチキ、第三はギヤング。インチキとは何か、詐欺に由つて金を得ることである。而してギヤングとは暴力を以て之を強奪することである。大都市に今此の罪惡が盛んに横行してゐるのである。而してそれは日本だけではない、全世界が、國と國とが、凡てインチキとギヤングである。少しく各種の國際會議の事情を知つて誰が之を否定し得る。

今や正義の念は各人の心から其の姿を潜めた。

而して其の結果何人も道義に信賴を置かない。自己の巧智と腕力以外に頼るものがなくなつた。そ

の結果は法の蔑視である。武力行使である。ウキカム・ステッド氏は最近「國際概観」を論じて云つた。「私の確信するところでは、今日は一年前よりも國際間の遵法精神は遙かに弱い。速かに之が強められなければ、千九百九年の秋と同じやうな、避け難い大事件に直面するであらう」と。千九百九年は塊とセルビヤ、獨と露との關係が切迫した年であつた。

何故かやうに國際間又個人間の信義が失墜したか。それは人類が神を嘲けり、神を棄てた結果である。都下の大新聞にこんな文が麗々しくある。

日本の聯盟脱退を英佛は氣にしました、神様の假色こはいろを使ふ聯盟屋さん達はどうなんだらう。

國家以上に高く嚴存する神の正義を認めず、神を嘲ける世界人類にバベル(混亂)が來るのは當然である。既に正義を信じない。その支配を恐れない。さらば何を以て國際間又個人間の契約を尊重し得

やう。既に國際間及び個人間に信義がない。何を以て遠大なる産業計畫、各國間の通商が起らう。現時極度の經濟界の恐慌、都市失業者の激増、農村の疲弊、之等は皆神を嘲けり、正義を蔑視した當然の罰である。

若し今にして悟らずば、—— 多分悟るまい。

—— 大戦争は再開されるであらう。其の時の荒廢は思ふだに恐ろしい。獨乙三十年戦争のすんだ頃には、人口激減し、土地は荒れ果て、繁華な都邑が數里の間鷄の聲を聞き得ない位淋びれたとシラ——は書いた。此の前の大戦争は終つたのではない。再び開かれる時、誰が其の終局を考へ得る。

現今の獨乙の混亂を見よ。僅か十數年でこんな今まで變り果てたではないか。此の先とこまで混亂が續き、國民は窮乏するであらうか。此の窮乏は神に對する背反と歩調を一にする。獨乙は歐洲文明國の縮圖である。

## イ エ ス ・ キ リ ス ト

(二)

江原 萬里

## 五 誘 惑

斯く御靈ただちにイエスを荒野に逐ひやる荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獣とさもに居給ふ、御使たち之に事へぬ。(マルコ一・一二)

## 誘惑の性質

全知全能の神には誘惑なるものはありやう筈はない。時間と空間とを超越し、過去と未來とは永遠の現在の中に在りて一望の中に之を見、宛かも圓周のない圓の中心の如く、何處にも偏在してそこが中心たり得る神、思ふて成らざるなく、己以外に意志を制限する何物もなき絶對自由なる神、然かも至上の善、最高の正義、愛であり給ふ神が誘はれ、罪を犯す危険に臨み給ふ事は全く有り得ない。誘惑は其の知、其の情、其の意志に限りある人のみある。獸類にもない。

何故人のみ誘惑があるか。それは人は靈と肉とを有てるからである。或は飢え渴き、或は喜び悲しみ恐れる事のある人に於ては、己が最高の使命の遂行、義務の命令と、此の生れ乍らの慾性との衝突が起り得る。その何れに己を委ぬべきか、爰に誘惑がある。殊更に峻峻なる道を通り、荆棘の中を歩む事は人間本來の肉の好むところではない。然かも我等が高き使命を感じ、義務を負ふ時敢て之を爲さねばならない。自己一身の安樂幸福を棄て己が智慧、能力、己が有てる凡てのものを擲ち、己が願望にすら反して、一切を神の聖意に委ねなければならぬ。イエスは全く人間であり給ひたればこそ「凡ての事われらと等しく試みられ給ふた。(ヘブル書四・一五)」然り、人は皆誘惑にかゝる。誘惑にかゝる事は必らずしも罪があるからではない。罪なき者にも人なれば必ず誘惑はある。アダムは元と罪なき者として創造された。然かも誘はれ、之に陥つた。罪ある者も罪なき者も誘はれる。然かも罪ある者の誘はれる誘惑は罪を機縁としてそれから發し、罪なき者の誘はれる誘惑は高尚なる

心から之に襲はれる。例ば、不義不正直な商人は只巨利を博せんがために不正を働かんとする誘惑にかゝり、常に正しき商人は家族が窮乏するのを見るに忍びず、之を救はんがために不正を爲せとの誘ひを受ける。

かく誘惑は罪から來り、又罪なくして來る。而して誘はれる者は必らずしも悉く之に陥る者ではない。罪から來る誘惑は陥り易く、罪なく高き精神ある故に生ずる誘惑は之に克ち易い。然し乍ら、人が誘惑の強さを感じ、之と戦ふ鬭争の激しさは、罪から來る誘惑でなくして、却つて人が罪から遠かり、正義を行ひ、正しく生きんとする時戦ふ誘惑である。己が高き使命を自覺し、良心鋭く義務の觀念強き者程、誘惑は頻繁であり、それに打ち克つまでの鬭争は激烈である。罪より發し、殆ど之と争ふことなくして直に降伏する誘惑程樂なものはない。

イエスが誘はれ給ふたのは、彼に神の聖意に背反する罪があつたからではない。彼の最高の使命が、彼の間性と衝突したところに發した。然もイエスの誘惑は罪ある者の誘惑と全然異なり、社會的野心、自己の能力の誇

虚榮心等から來た誘惑ではなかつた。彼には常に聖なる願望があつた。此の願望がそれよりも更に高い神の要求と相抵觸した時、そこに誘惑があつたのである。サタンはイエスを權勢慾、色慾、貪慾等を以て誘ふことは出来なかつた。彼はイエスを誘ふに、彼の建設せんとする神の國、彼が救主としての御業に就いて、より低き聖志を以てより高き聖志を誘惑したのである。

### 荒野の誘惑

ヨルダン河邊、父なる神が嘉納し給ふたイエスの聖志は、人類の罪を我が物とし、己が死に由つて神の義を我等に持ち來らせ、以て此の贖罪あがなはれたる人々の上に神の御國を建設し給ふ事であつた。今や彼は傳道の發足にあたり、如何にして此の「正しき事」を爲遂ぐべきかを思ひつゝ、四十日四十夜荒野を彷徨ひ給ふたのである。

彼の前には、一方には民衆がホザナと呼んで歓迎し、ユダヤの上流社會が彼を後援する道がある。他方には己が親しき家の者、心を籠めて導いた弟子にすら棄てられ

る、攀づるに峻しい十字架の道がある。今彼が選び採らうとし給ふ後者の道は彼の最良最愛の弟子にすら理解せられるべくもなく、己が受くべき死に對しては共に之を受けやうなど願ふものゝないのは勿論、之に何の同情もなく、ユダヤの宗教家は悉く彼を憎み、偽りの友は彼を賣り、群衆は喝采して嘲弄し、之を十字架に釘けよと叫び、民衆に媚びる政治家は彼を殺すであらう道である。

然り、人間の罪の暗黒のどん底にまで降つて、其の悲惨、悽愴、恐怖、絶望の酒杯を最後の残滓まで滿喫し、人の罪に對する神の御怒の全部を己が身に受け、人の最悪の運命を己がものとする事に由つて、己を十字架に釘ける罪の子らの罪の赦を得させ、神の愛の目的物とせしめる道である。父なる神の聖意、イエスの最高の使命はここに在つた。

然るにイエスは聖靈の降下に由つて、異常の智慧、絶大の能力を賦與せられ給ふた。此の智慧と此の能力とを以てして、今人々が悩み苦しむつゝある種々の困難から彼等を救ひ出し、その切なる欲求を滿し、彼等を喜悅に

躍らしめ、樂園を此の地上に築き、己も亦その王として偕に燕樂する方法を知り給ふた。爰に於てか、父なる神の聖意に絶對服従、自己の能力の抛棄、一切が悉く悲惨なる失敗に終る如く見ゆる十字架へのピア・ドロサ(苦難の道)と、民衆の期待しつゝあるメンヤ觀の成就との間に在つて、彼は永き日の間食を忘れ、荒野を彷徨し給ふたのである。而して

後に飢えたまふ。試むる者きたりて言ふ。「なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ」  
(マタイ傳四・三)

一 イエスは人として何人も感ずる飢を感じ給ふた。衣食の資の窮乏感、之がイエスの誘惑の機會となつたのである。然し乍らイエスは只の人ではなかつた。誘惑は「なんぢ若し神の子ならば」である。而して「此の石に命じてパンと爲さしめよ」である。我等が衣食に窮して襲はれる誘惑とは全く別の誘惑であつた。世の人の悩みを救はんとする異常の人が、身に異能を有し、之を何に使用すべきかについての誘惑であつた。即ち、如何にして世

を救ひ、神の御國を建設せんかを思ひ給ひつゝあつた時偶々身饑餓に襲はれ、痛切に其の苦痛を感じる事からして、之が機會となつて、彼は天賦の異能を以てパン問題の解決に用ゐよとの誘惑を受け給ふたのである。身饑餓に直面して始めて世の人の此の苦惱の切なるを知る。

然るにイエスは申命記の聖句を以てこの誘惑を拒否し給ふた。

『人の生くるはパンのみに由るにあらず』。

申命記を読む者は知る。イスラエルの民が曠野に在つた時如何にエホバは之にマナを供して養ひ給ふたかを。

『まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし』(マタイ傳六・三三)である。

パン問題は苦痛である。然し乍らそれは人生の最大の問題ではない。神の正義を正しく知り、其を行ふことを喜ぶやうになると、これこそ人生の最大問題である。それが完全に解決する時パン問題は自ら解けるのである。

イエスは單なるパンの救主として來り給はなかつた。

それ故ガリラヤに於て數千人にパンを與へ給ふた時、民

衆は熱狂して「實にこれは世に來るべき預言者なり」と云つて、彼をとらへ王としやうとした時、イエスはひとりにて山に遁れ、彼を尋ね來た者に殊更に不可解の語を以て彼等を失望せしめ給ふた。(ヨハネ傳第六章)

弟子たちの中おほくの者これを聞きて言ふ。「こは甚だしき言なるかな、誰か能く聽き得べき」……こゝにおいて弟子等のうち多くの者、かへりて去りて、復イエスと共に歩まざりき。

こゝに彼の十字架の道があつた。

二次の誘惑は、己が異能を利用して、奇蹟を以て世を救へとの誘惑であつた。イエスの心中、惡魔が己を「聖なる都につれゆき、宮の頂上いたゞくに立たせて言ふ」を聞き給ふた。

『なんぢ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんぢの爲に御使たちに命じ給はん。彼ら手にて汝を支へ、その足を石にうち當つること勿らしめん」と錄されたるなり』

イエスは度々此の種の誘惑を受け給ふた。イエスが眞

にメシヤであるか否かを、はつきり確信させられる爲、民衆もバリサイ人も學者たちも度々イエスに「徴」<sup>しるし</sup>を求めた。此の大病が癒えたならば、此の商賣が成功したならば私は彼を信じましたと云ひて、徴を求める者は今も尙甚だ多い。イエス若し無能であつて、彼等の願を聴き得ないならば、イエスに何の誘惑もない。然かもイエスは彼等を根本的に救ひ、神の聖意を實現せしめる眞の救主として、此の誘惑を拒否し給ふた。

彼は再び申命記の聖句を以て之に答へ給ふた。

『主なる汝の神を試むべからず』

イエスが救主として彼に求め給ふことは只信頼である。結果を見て信するのでなくして、見ずして信する信仰である。然り、我等には「ヨナの徴」<sup>しるし</sup>即ち十字架上の死と復活の徴より外に「徴は與へられじ」(マタイ傳一六・四)である。然かも我等はそれで澤山である。

イエスは傳道中度々人々の困苦を見て憐みに堪えず、思はず己が異能を顯はして之を醫し給ふた。されど一度たりとて人に見せるために之を使用し給はなかつた。

病の癒された者に「つゝしみて誰にも語るな」(マタイ傳八・四)と云ひ「嚴しく戒しめ」(九・三〇)給ふた。彼は異能を有し乍ら、之を自己の聖業の遂行に使用し給はず却つて之を棄て、只神に服従する事によつて、其の救主たる御業を成し遂げ給ふたのである。こゝに彼の十字架の道がある。

後、エルサレムにて十字架に釘けられ給ふた時、多くの者が彼を嘲けつて互に言つた。

人を救ひて己を救ふことと能はず、イスラエルの王キリスト、いま十字架より下りよかし、然らば我ら見て信ぜん。(マルコ傳一五・三一)

此の時、我等がキリストなる事を示すため、彼の異能を顯はして十字架から下り給ふたならば如何、彼を十字架に釘けた者は驚き怖れ、罪を謝し、彼を仰いで王としたであらう。然かも人間の罪は赦されず、基督教は存在せず、人は永遠に暗黒に彷徨ふものとなつたであらう。

三 最後の誘惑が彼の心中に起つた。惡魔は彼を「最高き山につれゆき、世のもろもろの國と、その榮華とを示し

て言ふ、

「なんぢ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんぢに與へん」。(マタイ傳四・九)。

彼の建てる神の國を、此の世の方法を以て建て、此の世の罪ある者の其の罪の欲求其の儘を満すやうな社會を造れとの誘惑である。十字架の道を離れて、此の世の政治家、社會改良家、革命家に倣へとの勸告である。之に對しては只一言を以て撃退すれば足る。

サタンよ、退け、「主なる汝の神を拜し、ただ之のみ事へ奉るべし」と録されたるなり。

惡魔は撃退され、イエスは完全に誘惑に打勝ち給ふた。然るにルカ傳はイエスの荒野の試誘を記して後、「惡魔あらゆる嘗試を盡してのち暫くイエスを離れたり」(四・一三)と述べて居る。イエスの公生涯の發足點に於て、惡魔は「あらゆる嘗試を盡し」た。宛かも大洋を航し、目的とする港に到着する前、まづ海圖に由つて己が航路とその遭遇することあるべき暗礁、激流、暴風雨、あらゆる困難と危険とを學ぶ船長のやうに、イエスは人類を

救の彼岸に導く航海の出發に際し、「あらゆる嘗試」を受け給ふたのである。然かも之に打勝つた後は最早何の試誘にも襲はれなかつたのではない。「惡魔あらゆる嘗試を盡してのち、暫くイエスを離れたり」である。

### 傳道中の誘惑

彼は其の後も度々誘惑を受け給ふた。彼が牧羊ものなき羊の如き民衆を憐み、大衆に食を給し給ふた時(ヨハネ傳六・二六)、石をパンにせよとの誘惑を感じ、エルサレムの宮を潔めて官憲より「何の權威をもて此等の事をなすか、誰が此等の事をなす權威を授けしか」(マルコ傳一一・二八)と問はれ、宮から身を下に投げて見せよとの誘惑を感じ、更に又ガリラヤにて民衆が彼を「來るべき預言者なり」としてとらへて王とせんとする時、世のもろもろの國とその榮華の誘惑を感じ給ふた。

就中、イエスが傳道中強烈なる誘惑を感じ給ふたのはカイザリヤ・ピリビの村に於てであつた。ガリラヤに於て一時熱狂した民衆はイエスに失望し、彼を棄て、孤獨

の人とならしめた。之れ元よりイエスの豫期し給ふたところであつた。此の時以來彼に従つた者は十二の弟子のみであつた。然かも此等の弟子は世に棄てられて見すほらしい一村夫子に、眞の救主、否、神の御子を發見した。イエスは心から之を喜び給ふた。

然るに「この時より」(マタイ傳一六・二一)イエス・キリスト、弟子たちに、己れ神の子が多くの苦難を受け、殺さるべき事が、救主たる聖業であることを明白なる言を以て「示し始めたまふ」や、今し大表白をなしたベテロは、「主よ然しかあらざれ、此の事なんちに起らざるべし」と云つて之を制めたのである。之を聞くや、イエスはベテロの中に、己を誘惑して十字架の道を離れしめ、救主として神から定め給ふた御業を妨げやうとする悪魔を認め給ふた。されば激烈なる言を以てベテロを叱咤し給ふた。

サタンよ、我が後に退け、汝はわが贖物なり。汝は神のことを思はず、反つて人のことを思ふ。(マタイ

傳一六・二三)

最愛の弟子をサタンと云ひ給ふたイエスは、此の時どの

位強くその誘惑を感じ給ふたであらうか。

多分此の時イエスは弟子たちに嘗て試みられ給ふた荒野の誘惑の経験を語り給ふたのであらう。彼は福音書に在るやうに之を印象強く、比喻を以て語り給ふたのであらう。然し乍ら、誘惑其の物は作話でなく、イエス自ら傳道開始直前實際に経験し給ふた事實に相違ない。若し之を弟子たちが想像になる創作であるとせば、その弟子は餘りに偉大なる作家である。荒野の試誘は、時はイエス將に公生涯に入らんとし、聖志は神に嘉納され、異常なる能力を賦與せられ給ふた直後であり、誘惑の性質は人類の救主、罪の贖主として此能力を如何にするかに關し、彼の一生を通じて彼を襲ひ、然かも彼は之に打ち克ち給ふたところの彼の根本精神に觸れて居る。其の強烈深刻、之をイエスの一生に照して見れば見る程此の話は事實であり、且つイエス自ら親しく弟子たちに告げ給ふたものと考へる外はない。而して其の時機も多分カイザリヤ・ピリピの村に於けるベテロ叱責の直後であつたであらう。

## 最後の誘惑

イエスの最初の誘惑が荒野であり、中頃の強烈なる誘惑がヘルモン山麓の淋しき村でありとせば、彼の最後の而して最も深刻なる誘惑は多分エルサレムなるゲツセマネの園に於けるそれであつた。此の時イエスは「憂ひ悲しみ、「わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり。汝ら此處に止まりて我と共に目を覺しをれ」と云ひて、頼りにならぬ弟子たちの慰すら之を求め給ふた程眞に身の弱さを感じ給ふた。彼は平伏して

わが父よ、もし得べくば此の酒杯さかづきを我より過ぎ去らせ給へ

と祈り給ふた。爰に人の子の強烈なる誘惑があつた。彼は最初から十字架の死を目標としてその道を右にも左にも一步も外れず來給ふたのである。今やその死に直面し給ふた。而して「此の酒杯」の全貌を明に見給ふた時、彼の受くべき人の罪の呪なる死の如何に暗黒、如何に醜惡、如何に悽愴なるかを知り給ふたのである。如何なる

大敵にも怖れない大膽、如何なる困苦にもひるまない勇氣、亭々として天際に聳えたる橄欖樹が、此の時は天地晦冥となるまで吹き荒ぶ嵐にもまれ、根 じとなるまで揺るぎ、右に左になぎ倒されるまで、イエスは誘惑に惱み苦しみ給ふたのである。

若し彼の直面し給ふた死が人間普通の死であつたならば、ソクラテスは遙かにイエス以上の偉人である。彼は己が不當なる死を前にして平然として弟子と共に哲理を談じ、宛か夕陽が西山に没し、夕焼が滿天に漲る如く靜かに死した。まことに偉人の死に相應しくある。然るにイエスの死は偉人の死ではなかつた。全人類の罪の審判を己が身に受けて、之に代りて苦しみ給ふ死であつた。一點の罪なく、全生涯悉く神の聖意と寸毫も齟齬なかりし彼、其の聖淨は天使も顔を覆ふて伏し崇む彼が、我等の罪を自分のものとして神の審判を己自身に受け給ふた死であつた。その故の苦しみで、そのための惱であつた。イエスは豫てから之を期し、之を目的として來り給ふた。然るに愈々其の死の全貌に直面し給ふや、流石の神の子

も罪の呪咀の恐ろしさにたちろぎ給ひ、之を忍ばんとして己が身の弱さを痛切に感じ給ふたのである。「もし得べくば此の酒杯さかづきを我より過ぎ去らしめ給へ」。十字架を避けんと此の誘惑、然かもイエスは之に打ち克ち給ふた。

わが父よ、この酒杯さかづきもし我飲まで過ぎ去り難くば御意のまゝに成し給へ。(マタイ傳二六・四二)

へブル書の筆者は此の時のイエスの苦しみを叙して深刻を極めて居る。

キリスト肉體にて在しゝとき、大なる叫さけびと涙とをもて、己を死より救ひ得る者に祈と願とを献うやむげその恭やさし敬やかしによりて聽かれ給へり。彼は御子なれど、受けし所の苦難によりて従順を學び、かつ全くせられたれば、凡て己に順したがふ者の爲に永遠とこしへの救もとの原もととなりて、神よりメルキセデクの位に等しき大祭司と稱へられ給へり(五・七以下)。

我等が神に對する罪が赦され、其の恩恵の對象とせられるには、「強き神の子、不朽の愛」すら己が弱さを感じ

じ、出來得べくば之が過ぎ去らんことを祈り、之を免かれやうとする誘惑に惱み給ふた程の犠牲が必要であつたのである。我等の罪がどの位神に於て重大な、赦すべからざる大罪であるかは、自分が自分の標準を以てしてはわからない。キリストの十字架を仰ぎ見よ。

イエスは全き人として、人の罪の結果なる惱み全部を己が物となし給ふた。彼は「民の罪を贖あがなはんとために凡ての事において兄弟の如くなり給ひ」(ヘルア書二・一七、「罪を外ほかにしては凡ての事われらと等ひそしく試みられ給へり」(四・一五)。只我等と異なり、罪から出た誘惑ではなかつた。彼の受け給ふた誘惑は、我等の一切の罪を贖はんとする心を他にそらし、自ら我等の罪となる事を妨げしめやうとする誘惑であつた。之に打ち克ちて我等の弱さ、我等の罪、一つとして彼の物とし給はないものはないとなつた。その誘惑は我等の生涯の過去、現在、永遠の末まで及ぶ最も深く最も悲惨なる運命を己が物としやうとする愛の意志に對する嫌惡の誘惑であつた。其の戰の激烈、然かも完全に之に勝つて彼は完全に我等の救主と

なり給ふたのである。かくて

彼は我等の弱きを思ひ遣ること能はぬ者にあらず。

罪を外にして凡ての事、われらと等しく試みられ給へり。この故に我ら憐憫を受けんが爲、また機に會ふ助となる恵を得んがために、憚らずして恵の御座に來るべし。(四・一四)

である。我等が人間の子として悩む種々の苦難、罪、その誘惑、私の、又あなたの、一人一人の苦しみが悉く彼の悩みであり、苦しみであり、かくして私が私を知る以上に、又あなたがあなたを知る以上に、イエスは我等の運命とその悩みとを知り、之を我物として我等の苦惱の禍因である罪の赦を得させ、罪から救ひ出し得る基礎を置き給ふたのである。彼は神の御前に私を代表し、本當の私となり給ふた。イエスは完き人として誘惑に打ち克つて此の聖業を成就し給ふたのである。かくて我等は皆キリストに在りて神の子たり得る途が開かれた。

## 魔法を信ぜず

江原 萬里

私は不合理を眞實として認めることは出来ません。虚妄だから信するものではありません。道理に合ひ、本當だから信するのであります。それ故若し基督教は不合理であり、虚妄であり、阿片の陶酔であるならば、私は今日之を棄てます。又基督教の教への中にそんなものがあるならば、どうしてもそれに同意することが出来ません。

私がどう考へても同意出来ないことは、カトリックの聖餐の教義であります。カトリック教會では司祭の施行するパンを食へばそれが眞實キリストの肉を食ひ、葡萄酒を飲めばそれが眞實キリストの血を飲んだのであると教えます。之に由つてキリストの天的生命を獲得するのだと云ひます。私にはどうしても斯やうの魔法を眞實と思ふことが出来ません。若し此の教會に入つて、此の聖餐式に與らねば救はれないと云ふならば、私は救はれま

x

x

x

x

いと思ひます。そして救はれなくても仕方がないと思ひます。又若し此の教會に入つて其の思想統制に服しなれば、現代の思想的アナキが救済されないものであるならば、それは何時までも混亂を續けるでしやう。私は寧ろ其の方がよいと思ひます。何となればそこに眞理を求め眞剣さがあり、魔法に満足しない眞實がある。

私がどうしても本當と思へない第二の事は、キリストの十字架を見上げた瞬間に、癩病人のやうに腐つた私の罪が生れ立ての赤ん坊のやうに潔まつたと云ふことであります。私はキリストの十字架の贖罪が基督教の根本であると確信し、私自身そこに永遠の希望の根據を据えて居ます。然し乍ら、私はキリストの十字架を見上げて只の一度もそんな變化を實驗しません。若しそう云ふ變化を實驗しなければ私は眞の基督教者でないならば致方ありません。基督教を説くことをやめます。私はかやうな魔法を信じ得ず、實驗致しませんから。

此の魔法は、私にはカトリックの魔法と根源を一にするやうに考へられます。抑もカトリックの中心思想は、

罪人なる私達が神の恩恵の目的物となるには、即ち義とされるには、神が先づ私達に新しい生命を賦與し、神がそれを見て私達を義人と認め給ふからであると云ふのです。信仰に由るのでなくして行爲に由つて義とされると解せられ易いのはその爲です。然らば神はどうして私達に新生命を賦與し給ふかと云ふに、彼等は教會、即ち天下唯一の教會であるカトリック教會に入つて、お坊さんの施行する聖餐式に列し、パンを食ひ、葡萄酒を飲むことだと云ひます。パンと葡萄酒とが私達の胃袋に入つた瞬間、癩病人のやうに穢れた地的生命に初兒のやうに潔い天的生命が入り來ると云ふのであります。キリストの十字架を見上げた瞬間、癩病人が赤ん坊になつたと云ふとどの位違うでしやうか。

若し、此の教會に入らねば、又こう云ふ説を基督教の中心として受容れねば、私は救はれないならば、私は救はれない事を感じます。私には此等はマルクス主義者が嘲けるやうに阿片の陶醉であるとしか思はれません。私のロマ書は之と別のことを教えてくれます。

# エレミヤの悲哀

(二四)

エレミヤの悲哀

江原萬里

エレミヤの偉大

古來史上に輝く偉人の生涯を研究することの限りない興味は、彼等が豊かに賦與せられた天分と之を歓迎し助長せしめた時勢との相互の呼應交響にある。韓退之は云つた。

龍、氣を嘘ふき雲を成す。雲固より龍よりも靈ならず。然れど龍是の氣に乗り、茫洋として玄間を窮め、日月に薄まり、光景に伏し、震電を感じ、下土を水にし、陵谷を泪しむ。雲も亦靈怪なる哉。……龍の靈は雲の能く靈を爲さしむる所にあらず。然れども、龍は雲を得ざれば以て其の靈を神にすること無し。其

の憑依する所を失へば、まことに不可なるか。  
……既に龍と曰へば雲之に従ふ。

天才人の欲する所が時勢の要求に相合致し、以て彼の偉大を成し、新時代を創成するのである。

然るにエレミヤの偉大は全く之が例外をなすものであつた。彼自身が成した事業、其の後世への貢獻は、彼自身毫も之を願はず、少しも豫期しなかつた所であり、彼の時代の人々も亦之を歓迎しないのみか、甚だしく之に反感を懷き、彼を酷遇迫害し、窮厄の極に陥らしめ、悲惨なる最後に終らしめたものであつた。一言以てせば、彼の生涯の偉大は彼の失意、時勢の背馳の中に成就せられた。こゝにエレミヤの特異性がある。此の特異性に由つて、我等は彼の生涯に顯はれた天啓の何たるかを知る。

當時、彼の時代は國の將來について甚だ樂觀的であつた。何人も滅亡などとは思もよらず、かゝ

る事は思ふだに不信仰であり、冒瀆であるとした。然るにエレミヤの眼には、國の滅亡は既定の事實として、その悲惨なる状態がありありと現はれ來り、如何にするも之を拂ひ難くあつた。彼は只獨り之を想ふて日夜泣いた。

一九 噫、吾は禍、汝衰へたり。

なんちの傷は重し。

されど吾云ふ。

之まことに我が**禍患**なり。

吾、これを忍ばざるを得ず(第一〇章)。

### 神の強制

前にも云つたやうに、國の滅亡、神殿の破壊に關するエレミヤの預言は、彼自身の意見でなく、彼自身の欲したものでない。何ものか彼の潜在意識中に籠つて、彼を捉へ、彼をして已むに已まれません語らしめた或る力であつた、彼は之に強ひら

れてその言を語つた。その結果は國民の嘲笑、愚弄、迫害であつた。

七 エホバよ汝は吾をすかし、

吾は汝にすかされまつりぬ。

汝は餘りに強く在まして、

吾をば遂に敗かし給ひぬ。

八 吾は日々物笑となり、

人皆吾を愚弄すなり。

吾語る毎に恥を受け、

「兇暴、無法」と吾は叫ぶ。

エホバの御言は我が不評、

ひねもす我が嘲笑となる。

九 若し吾彼を思ひ出さじ、

御名をもて語らじと云はゞ、

我が胸の裏に燃ゆる火のごと、

わが骨の中に閉ぢ籠り、

抑えんとして勞れ果てつ、

黙さんとしてでもだし得ず。

一。吾は人々の囁くを聞く、

「密告！ 我ら告訴すべし、

彼の親しき友なる君等よ、

彼の言の揚げ足をとれ、

我ら彼を愚弄して、

怨を晴す力を得ん」と。

二。されどエホバは憐に在す。

エホバは剛き勇者なり。

されど我が敵は躓つきて、

吾に勝つを得ざるべし。

彼らは事をやり損じ、

大なる馬鹿を見ん。

その恥は永く續き、

忘れらるゝ事なからん。

三。噫エホバよ汝義人を試み、

人の心の底を見る者。

吾訴ふなれば彼らの上に

汝の報を見させ給へ（第二〇章）

之に由り我等の知り得ることは、エレミヤの預言の性質である。聖書に記録されてゐる之等の言は之を語つた者が自分で抑制出来ない、絶對なる他者の命であつた。エレミヤの預言を研究する者は此の事を牢記せねばならない。

### 陰謀圍繞

エレミヤが若き日申命記改革に賛成し、其の精神を國中に宣傳へた時、圖らずも郷里アナトテの人々、殊に己が兄弟まで陰謀を以て彼の生命を奪はうとした。エレミヤの一生は常に彼の生命を求めらる者の陰謀に圍繞された。彼がエルサレムに移り住み、其の活動の範圍が廣まり、勢力が増し、社會的位置が高まるにつれ、彼を陥れやうとする陰謀も亦複雑となり、陰險となり、廣範圍となつた。

一八 かれら云ふ。いざ、エレミヤに計略をかけん。そは律法は常に祭司に、智慧は賢き者に、御言は預言者に在りて失せざるべければ。

いざ、我ら彼を辯にて打ち、彼の云ふところを斟酌せざるべし。

一九 噫エホバよ吾に心を用ひ、

我が訴の聲を聴き給へ。

二〇 善に惡を報ゆる者あらんや、

彼ら吾を殺すため穴を掘る

噫憶へ給へ、御前に立ちて、

汝の怒を避けしめんため、

吾彼らのために執成せるを。

二三 エホバよ彼らの吾を殺さんとする。

たくなみを汝は知り給へり。

彼らの諸惡を赦し給はず、

其の罪を御前より抹すこと勿れ。

汝の御前に彼らを仆れしめ、

汝の怒の日處分し給へ（第十八章）。

### 自己の存在の嫌惡

彼は生れつき多感であつたが、その本性は決して争闘を好む人ではなかつた。然も預言者として神に立てられて、かくの如き激情の人となり、一度不義を見て義憤を發するや極端から極端に走つた。それでこそ、彼は人々の達しない深いところに達し、人々の見ない高いものを見た。然し乍ら此の激情は彼の好むところではなかつた。彼は平和を愛し、人々の親睦を願つた。それ故なせ自分のやうな者が生れ出たかと、吾乍ら自分の存在がいやになつた。

一四 詛はれよ我が生れし日、

我が母吾を生みし日よ、

その日は祝はれされ、

一五 「男の子生れぬ」と父に告げ、

父を喜ばしたる者詛はれよ。

一六 その日はエホバの憐なく、

滅ぼされたる町のやう

朝には叫聲さけびを聞かしめ、

晝には喊とどきの聲を聞かしめよ。

一七 そは吾を母胎の中に殺さず、

我が母を我が墓とせず、

その胎をふくらましたれば。

いかなれば吾は母胎を出で、

かく勞苦くろしみと憂愁かなしみとを見、

辱ぢて空しく日を過す(第二十章)。

### 癒されんとすの祈求

さり乍ら彼が敵に罵られて罵り返へし、呪はれて呪ひ返したのは、己が私憤からではなかつた。

彼は徹頭徹尾神の預言者たるの自覺に生きた。それ故神の御言葉が愚弄され、神の正義が蹂躪されるのが何よりも苦痛であつた。その爲めの義憤であつた。それ故彼は自分の語る言が眞實神の言で

ある事を、神が明白に證據立て給はん事を願つた。

神のために、その愚弄者、迫害者が憂き目を見ん事を祈つた。若し然らずば、一體神は何を爲し給ひつゝあるか。此の世は神の攝理の下にないのか。神の御言を信じそれを語つた自分は全く馬鹿を見たのか。其の生涯の此の苦しみは全く無駄な事であるか。此の心の痛みは、不義なる者の罰せられるのを見るまではどうしても癒され得ない。

一四 エホバよ癒し給へ、さらばわれ癒えん、

救ひ給へ、されば救はれん。

汝こそ我がさかえ。

一五 視よ彼ら我に云ふ、

御言は一體いづこにありや、

今それを臨ましめよと。

一六 われは惡しきことの來るをせがまます、

禍の日を願はざりき、

汝これを知り給ふ。

わが唇より出でし言は、

汝の御前にあらはなり、

一七 汝わが恐怖となり給はざれ、

災の日のわが避け場よ。

一八 わが敵に恥を與へて吾に與へず、

彼らを怖れしめて吾を怖れじめず、

彼らに禍の日を來らせ、

滅びに滅びを加へ給へ（第十七章）。

### 神は人心の探索者

彼は神に對する自分の誠實を疑はなかつた。然し乍ら、彼も弱き人間の子である。彼は知らず知らず、自分は神から特に選ばれ、親しまれ、衆と異つて特別の靈的能力を賦與せられて居ると自負し、人に對しては自分の優越を誇り、神に對しては自分の誠實を主張し、度々「神の求め給ふ物は碎けたる靈魂」（詩五一・一七）にして「唯正義を行

ひ、憐憫を愛し、謙遜りて汝の神と偕に歩む事」

（ミカ書六・八）を忘れる自己を發見した。

爰に於てエレミヤは人の心の複雑多岐であつて容易に極め難く、然かもその全體が虚偽にして髓の髓まで疾み、人間の意志は全く腐廢してゐる事を悟つた。神の聖き眼を以て之を見給へば、どんなに醜いかを思はざるを得なかつた。

九 底ひも知れぬは人の心、

達し得ぬまで病みてあり、

之を知るものは誰ぞ。

一〇 吾エホバはその心を索り、

その想を驗す。

おのおのゝ途に従ひ、

その行の果を與ふ（第十七章）。

此の篇未完結なれど之にて中止す。

## 造船學より見たるノアの方舟

山 根 儀 市

汝松の木はこぶねをもて汝のために方舟はこぶねを作るべし、其長さ三百キユビト、其濶ひろさ五十キユビト、其高は三十キユビトなるべし。  
(創世記六章)

最近の考古學は大洪水の史實性を裏書した。(本誌四五號小栗氏論文)。然らばその時ノアが難を免がれた方舟は造船學から見て果して設計が可能であるか否かを研究することは興味あることである。これに關し英國海軍中佐トランパー氏の説を紹介する。

一キユビトは短尺は六手幅、長尺は七手幅である。内村先生は長尺二十一吋と計算せられたが、今ビークに従つて短尺一七・七、即ち十八吋として計算すれば、方舟は  $450' \times 177.5' \times 35.4'$  となる。十七世紀の始め、和蘭人ビーター・ヤンソン

は試みに方舟と同じ割合の船を作つて見た。氏の有名な實驗によれば、其は船浮力は相當にあつて貨物を積載して運搬するには適當したが、大砲を積むには不適當であつたとのことである。

現今世界の最大汽船は、元獨船で今米國の所有となつてゐるレヴィアサンである。此の船は、 $307.6' \times 100.3' \times 35.2'$ 、總噸數五九・九五七噸である。此の船や今又建造中である七萬噸の汽船に比較して見れば、方舟は遙かに小さい。丁度英國軍艦キング・エドワード七世は  $450' \times 120' \times 35'$ 、排水量一六・三五〇噸)が丁度方舟と同じ位の大きさであらう。日本の商船について言へば方舟の大きさは大洋丸位である。

然し乍ら、現代の巨船は皆鋼鐵製であるから、造船上材料の長短、強弱等に關して木舟とその設計が異なるは勿論である。ノアの方舟の設計が造上船可能であるか否かを研究するには、木造船と

比較考慮しなければならぬ。

之と比較し得る格好の船の第一は、千八百三十八年十五日間で大西洋を渡航して紐育に着いたグレート・ウエスタン號である。此船は有名な造船家ブルネル氏の設計で、大西洋横斷船として最初に建造せられ、其の當時の優秀船であつた。其大體は  $212' \times 357.5 \times 23'$  であつた。第二は一九〇九年に米國のバスで造られた最大の木造船ワイオミングが選ばれるであらう。大きさは  $350' \times 50' \times 30'$  であつた。

今此のグレート・ウエスタンとワイオミングとノアの方舟との長、幅、深の割合を比較すると次のやうである。今幅を一とすれば、

船名	幅	長	深
方舟	一	六・〇〇	・六
グレートウエスタン	一	五・九七	・六
ワイオミング	一	七・〇〇	約・六

之に由つて見る、五千年前のノアの方舟と、十

九世紀及二十世紀の最大造船家の設計に成る船と其の割合は僅か數時の差に過ぎない。船體に大小こそあれ、三者の設計の比率が殆んど同一であることは驚嘆に値する。

之はノアの出鱈目の設計が偶然最新の設計と暗合したのであるか、或はノアが爾來五千年間の經驗を豫知し、既に高等數學を使用して材料強弱を研究した結果であるか。否、兩方共あたらない。ノアは只神の命に従つて方舟を建造したのであつた。然かもそれが現今の進歩した造船學と一致してゐるのである。之は驚嘆すべきことである。而してこのノアの方舟が造船學上可能であることを知つて、聖書に記載されてあるノアの洪水は荒唐無稽の作話でなく、益々その史實が證據立てられるのである。

主筆曰、山根君は練達せる水先案内者として斯界に名聲がある。

## 受難週間の研究

(七)

## 最後の晩餐

小 栗 襄 三

静かな一日の休養を山中に過されしイエスは、愈々その極まで愛し給ふた御弟子十二人と訣別する時は來たつた。この三年間手鹽にかけて育てられし弟子、寢食を共にし、勞苦を共にし、迫害を共にせし彼等、イエスにとつては忘れ難い一人一人であり、印象深い弟子であり、又友であつた彼等と、十字架に就かるゝその前夜訣別の夕餐を共にせらる可く過越の準備をせられたのであつた。

正宴は御弟子の家の二階で開かれた。一堂に會する者十三名、主と彼れに選ばれし御弟子は此處に現世に於ける最後の食卓を圍む事となつた。誠に「視よはらから相睦とともにをるはいかに善く

いかに樂しきかな」と歌はれし如く、又イエスの手に持つパンの一つなるが如くに、皆今日に到るまで一家族として過し來りし者の會食であつた。各自に廻さるゝパンは一つ、酒杯も一つ、果汁を入るゝ鉢も一つであつた。總てが骨肉以上の親しさの内にある者の會食であつた。

斯て彼等に言ひ給ふ「われ苦難の前に、なんぢらと共にこの過越の食をなすことを望みに望みたり。われ汝らに告ぐ、神の國にて過越の成就するまでは我復これを食せざるべし」。かくて酒杯を受け、かつ謝して言ひ給ふ「これを取りて互に分ち飲め。われ汝らに告ぐ、神の國の來るまでは、われ今よりのち葡萄の果より成るものを飲まじ」またパンを取り謝してさき、弟子たちに與へて言ひ給ふ「これは汝らの爲に與ふる我が體なり。我が紀念として之を行へ」と。斯して新らしき契約はイエスに因よりて取り行はれた。

乍併ら、この聖宴中イエスの心は騒ぎ又搔亂されてゐた。遂に再び口を開き『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らの中の一人われを賣らん』と。イエスにとつては斷腸の思ひであつたであらう。此世より選び分ちし愛弟子に、然かも今日迄自分の財囊を預け置きし信頼する者に向つて、この言葉を發せざるを得なかつたイエスの心境は我等の想像に餘りある。嚴肅な聖宴に一石は投せられた。弟子等は互に顔を見合せ、誰について言ひ給ふかを訝らざるを得なかつた。彼等は悉く憂ひて、おのおの異口同音に『主よ、我なるか』と問ひ質した。ユダも亦『ラビ、我なるか』と。答は簡單であつた『汝の言へる如し』と。斯で一撮の食物を受けて後ち、彼れは食席を立つた。

一瞬間重々しき空氣は室内に漂つた事であらう。ユダは己が陰謀を看破され羞恥の餘り席に居たゞまらず外に出た。して祭司長の元に馳るその

路すがら彼はイエスのメシヤに非ざるを念じつゝ、あつた事であらう。彼のメシヤ觀は現世に於ける王國の建設であつた。特にユダヤ人であつたに彼は、ユダヤ思想のメシヤ觀にのみ捕はれ、イエスの説く神の國を理解し得ず、従つてイエスのメシヤなるを信じ能はなかつた。悲劇はユダの反信行為の問題ではなく、實にユダヤ思想とイエスの福音の對立に醸されてゐた。然らざればゲツセマネの園に接吻を以つて恩師を賣る程の大膽なる行爲はユダと雖もなし得なかつたであらう。

他方イエスに於てはユダの離叛に由り、一層切實に己が踏む十字架の道に確信を持たれた事であらう。彼れの贖罪の路は只に全世界全人類の救罪のみならず、ユダに迄をも慈愛の御手を延べられる可くあつた。ダビデは歌ふ。

わが恃たかみしところ、わが糧を喰ひしところのわが親しき友さへも我に叛きてその踵をあげ

たり、然はあれどエホバよ汝願はくは我を憐  
み我を助け、起したまへ、されば我かれらに  
報ゆることを得ん。

側らに侍る弟子等には幸か不幸かこの重大な出  
來事を理解し得なかつた。或る人々はユダが財囊  
を預るによりて『祭のために要する物を買へ』と  
イエスの言ひ給へるか、また貧しき者に何か施さ  
しめ給ふならんと思つた程であつた。もし彼等が  
この事件が主を十字架の極刑に迄導くを知つてゐ  
たならば、性急なペテロはユダを捕へたであらう  
し、又他の弟子等も斯く自由に彼に席を立たしめ  
なかつたであらう。事實を知るはイエスとユダの  
みであつた。

ユダの立去つたのち、イエスは自己の擔ふ十字  
架の意義の益々深遠なるを自覺され、又愈々死の  
迫つた事を知るや、心は暴風雨前の静けさに戻ら  
れた。して諄々と寸鐵の御言葉は十一名の弟子に

語り初められた。『今や人の子、榮光をうけ、神  
も彼によりて榮光をうけ給ふ。神かれによりて榮  
光をうけ給はゞ、神も己によりて彼に榮光を與へ  
給はん、直ちに與へ給ふべし』云々と彼の御言葉  
は盡きない。今や何の比譬をも用ひ給はず、明瞭  
に御國に就て、御靈に就て神とイエス、イエスと  
弟子の關係に就て述べ、又彼の人生觀を吐露し、  
弟子等を慰め勵まし遂に『なんぢら世にありては  
艱難あり、然れど雄々しかれ、我すでに世に勝て  
り』との凱歌を以つて遺言は終つた。それより彼  
は目を舉げて天を仰ぎて祈られた。(約翰十七章)  
斯くしてイエスは弟子たちと偕にケデロンの小  
川の彼方なるゲツセマネの園へと、過越の讚美歌  
ハレル(詩篇百五―百六篇)を歌はれながら進まれた。  
終歌(詩篇百十八篇か百三十六篇)の歌はれる頃、イエ  
スは橄欖樹茂る園に入られた事であらう。時は夜  
も更けてゐた。

## アブラハムの信仰 (下)

石川 伸 伊

エホバはアブラハムに「汝の妻サラ必ず子を生まん、汝其名をイサクと名づくべし。我彼および其後の子孫と契約を立て永久の契約となさん」(創世紀二七・一九)と約束し給ひし如く、奇しき恵を以つてサラを眷顧み、男子を生しめ給ふた。

「望むべくもあらぬ時に尙望み」、信仰生活を續くること二十有五年、アブラハム百歳に及びて遂に約束は成就した。イサクはやゝに成長した。彼こそは約束の子であり、天の星の如き多くの子孫は彼によりて現はれんとするのである。然るに或る時またエホバはアブラハムに臨んだ。

是等の事の後、神アブラハムを試みんとて之をアブラハムよと呼びたまふ、彼言ふ我此に

あり。エホバ言ひたまひけるは汝の子、汝の愛する獨子即ちイサクを携へてモリアの地に到り、わが汝に示さんとする彼所の山に於て彼を燔祭として獻ぐべし(創世紀二三・一、二)。

あゝ此れ何たる矛盾ぞ。たゞ一人の子イサクである、エホバは彼によりて天の星の如く無数の子孫生るべしと約束し給ふた。然るにその一子を燔祭として獻げよとエホバは命ずるのである。世にかくの如き不合理があらうか。アブラハムはエホバの約束を信じて疑はざりしにエホバは反つて其の約束を撤回せんとし給ふのである。

こゝに信仰の人アブラハムに深き煩悶があつた、『約束を信せんか、命令を如何せん。命令に従はんか、約束を如何せん。信者アブラハムの煩悶は茲にあつた。彼にとつて信仰は實驗以外の事ではなかつた。故に自己の良心の上に何かの解決を得ない限りは矛盾せる二つのものを受入るゝこ

とは不可能であつた。彼は疑ひ惑ふた、神の眞意は果して何處にあるのであらうか。神は今我をしてイサクを献げしめて、如何にして彼の子孫に對し永久の契約を立てんとし給ふのであらうか、知らず、我れ今彼を献ぐべきか、或は獻げてはならぬのであらう乎と」(藤井武全集第八卷一八九頁)。

思ふにベエルシバの地に於て大なる痛手を負ふたアブラハムは如何に煩悶を重ねし事であらう。しかし聖意は嚴として動かし難い。遂に彼はエホバの命に従ふべく決意した。

如何ばかり解しがたきみことば、

背理また無情のきはみにもせよ、

今は思議すべき時ではない、

今はただ彼が聖命のゆゑに

然り、聖名のゆゑに、目をとちて

黙して、ひとへに従ふべき時!

たゞかの聖なる約束はいかに、

イサクより出づべき裔にかゝる

萬民の福祉の約束はいかに。

みことば何とて廢るべきか、

天地は過ぎゆくとも、神のみことば

何とてむなしく廢るべきか。(藤井武全集)

かくて彼はその獨子を捧ぐべく燔祭の柴薪を取つて其の子イサクに負はせ、手に火と刀を執りて二人ともにモリアの山に往つた。

「イサク父アブラハムに語りて、父よと曰ふ、彼答へて子よ我此にありといひければ、イサク即ち言ふ、火と柴薪は有り然れど燔祭の羔は何處にあるや。……アブラハム言ひけるは子よ神自ら燔祭の羔を備へたまはんと」(三三・七八)。遂に彼は神の示し給へる處に到るや其處に壇を築き、柴薪を列べ、子を縛りて之を壇の柴薪の上に載せ、手を舒べ刀を執りて屠らんとしたのである。

時にエホバの使者天よりアブラハムを呼びて、

「汝の手を童子につくるなかれ、亦何をも彼に爲すべからず、汝の子即ち汝の獨り子をも我がために惜まざれば我今汝が神を畏るゝを知る」と。

彼目を舉げて見れば後に牡羊あり、その角叢林にかゝりあるを發見し、往きて之を捉へ、燔祭として子に代へてこれを献げた。實際アブラハムはイサクを献げて見た處が心配した程の事は無かつたのである。

若しアラブハムが私情にはだされてエホバの聖命令に従はずイサクを献げ得なかつたとしたならば、彼はエホバに對する信仰を見失つた事であらう。誠に信仰とは神自身を信することである。たゞアーメンのみを以つて神を義とするで事ある。それ以外に信仰はない。アブラハムの信仰こそ眞に信仰の典型である。我等は此處に信仰なるものゝ本質を學ぶのである。彼はハランを出でよと云へば命これに従ひ、獨りイサクを献げよと云へば

命これに従ふ。そこに如何なる疑惑が起り危機が臨んでも、何の躊躇もなく直ちに神の命に従ふ。これ眞に神御自身を信じたからである、此の信仰ありしが故に彼は義とせられたのである。

我等もまた宜しく彼の信仰に倣うて、貧困に苦しめられ飢餓に陥れられ、不治の病に冒されても絶対に神を信すべきである。彼が奪ひ取るものはいかに手放しがたき者でも逆はず背かず、聖手に委ぬべきである。而して撲たるゝも殺さるゝもたゞ聖意に服従すべきである。殊に愛する者を此世より取去られた時の如き、あくまで此の信仰の上に立たねばならぬ。事は人より見ていかに慘酷であつても「エホバ與へエホバ取り給ふなり、エホバの御名は讃むべきかな」と讃へしヨブの如く神の道を義とせねばならぬ。そして來世的生命を信じ「神は死人の中より之を甦へらすことを得給ふ」と復活の希望を抱かねばならない。

# 柏木通信

(第廿二廿三信)

齋藤宗次部

## 柏木の昨今

此夏の柏木は頗る静かであつた。七月下旬から九月上旬まで余は獨内村家に起臥し勞働した。

シオンの山を護る衛士となつて此處に秘藏さるゝ全集の原稿其他を晝夜勞つた。月光に照されながら蚊帳の裡に端坐して祈る時に、主は遠近の兄弟を思はしめ又日本國を愛する心と言葉とを興へて此弱卒の身を憐み給ふた。

八月の大部分は鈴木長本兩兄と共に全集の校正に夢中であつた。天沼の里に視力を絞る山本兄も屢々來つて疑點を議した。連日の暑熱は屋瓦に迫るとも涼風は我等に味方して朱筆の運びを亂させなかつた。高原の夏草を摘むの快を持たず、砂濱に立つて海よ海よ我を廣くせよと歌ふ樂しさは味はれなかつたが、然し湘南片瀬からは時々喜報が音づれ、又樺太の敷香からは、祐之博士のオロツコ、ギリヤーク、キーリン、ヤクトー諸族及び海豹の研

究に興深しとの通信が届き、其他加洲羅府の小葉竹氏は全集三拾餘部の注文中に添へ漫々たる希望を認めて送り呉れ、札幌の宮部博士は珍重なる寫眞と深甚なる謝辭とを寄せられ、北陸東北千葉九州旅順などから嬉しき知らせは來り、特に富士山麓に閑居の石河畫伯は佳信を飛ばしてガラリヤ湖畔の静境を叙し、巴里巷頭の苦戦に基督者としての日本民族の鮮血を灌がれし事實を告げて蟄居の余の心を躍らすなどあつて、居ながら全國否世界に呼應するの慨があつた。獨梧桐の影に夕陽を葬ることを繰り返す静かなる生活の中にも盡きざる恩寵を深く味ふことが出來た。目前の秋が數々の希望を乘せて近寄り來るを見れば、麻痺せる様な又狂へる様な悲哀怒號の世相と並んで歩みながらも神の奇しき聖業は絶間なき前進を續けつゝあることを信ぜざるを得ない。

初秋の柏木は、湘南の海岸より健康にて歸られし夫人淺間山麓香掛より歸りし壯軀の岡田兄、校正の爲に陣を張る我等の歡聲、今井館の集會に擧がる讚美の歌等によつて中々賑かである。前庭の葡萄後庭の木犀は得意の芳

香を送り來り、柿の實は秋空に覇たらんと黄金の光を放つなど、陋巷に圍るゝ一境域に平和怡懌の別天地を見るのである。

### 日曜日の集會

柏木教友會の集會は、八月中を正式には休むことに決したれど有志の人は依然之を繼續して守つた。集りが小さければ小さいなりの特徴が發揮されて聖靈の賜物は相變らず滿ち溢るゝものがあつた。

九月に入つて教友互に愛と希望を抱いて相見語りし時の喜びは甚だ深きものであつた。更に信仰を一つにして共に父なる神を讚美せし時の樂しさは主に在る讀者の等しく推察同感せらるゝことであらう。

一、基督の弟子に對する態度 藤本

一、罪の赦し 大島

一、信仰と曠野 齊藤

一、モーセの信仰 山根

### 小國傳道の報告

シンシントモニツカル、ゴカトウヲコフ

山形縣の山奥に入つて素朴なる農民に基督の十字架を紹介しつゝある鈴木榊本二氏から此電報を受取りし我等は敢て驚きはしないが、各々祈の座に着いて切に主の御心を願ひ求めた。それと共に西方亞細亞のルステラ、イコニオム、アンテオケ邊の山郷を旅せし使徒パウロを追憶し、是れ大任を負ふ信徒の榮譽ある患難なるを知つて、日本初代開拓者の爲めに益々祈らざるべからざるを感じた。彼等を萬事不便なる羽前荒川上流の畔りに案じつゝある間に數日は過ぎ去つた、時に又

拜啓兩名共に無事に働いてゐます皆々様の御祈りの御蔭にて小生の力以上に福音を唱へる事が出来ました各地の友人が聖書をよく判つてくれます津川村が非常に有望になつて参りました北小國にても福音を説くことが出来ました熱心なる青年が六名集りました我等が福音第一に立つて戦ひますならば必ず云々

の端書に接して只々深き感謝であつた、曩て九月一日若き二人の兄弟は山なす喜信を懷にして靜かに都の空に歸り來り、我等の前に主の爲し給ふ御業を開陳された。世

の權に坐する人よ、富に動く人よ智に生くる人よ諸君は諸君の可しとする所に勞苦して何時までも迷宮の彷徨を續けよ。我等はナザレのイエスの十字架と復活とを傳へて永久に倦む時なけん。

### 林文左衛門氏逝く

佐賀縣西松浦郡西山代村なる偏境の一陋屋に孤獨の生活を營み來りし同氏は、病と貧と人生問題の悩みと迫害とを以て織り成されし生涯を、終に其晩年に賜はりし十字架の信仰を以て美化し聖化して嚴かなる勝利の死を實現した。余はキリストに在りて親交なる彼と一面識もなく其年齢さへ知らない。然し氏が嘗て尼ヶ島の或る寺院に入つて佛門に罪業の淨めを果さんととして得ず、病痾を抱いて其處を去り、世路に職を求むるも體力許さず、飄つて文藝に一種の忘罪術を試みて子規の俳風に精進し漸次北九州に名を揚ぐるに至りしも骨肉近親の死別と家運の没落によつて苦鬪募り、縁戚の強き排斥と嘲罵の下に咯血に肺腑の崩れ行く前半生の後不圖柏木に端書を送つて聖書之研究と聖書の購求方を尋ね來りし以後の短き後半生たる五年間の事は頗る精細に

知つて居る。其際内村先生は余に返信を發する事を命ぜられた。余は意を盡して返答を書き送つた。纏て光明慰安只此處に在りと信ずといふ意味の書信は重要な數多の質問を載せて余の掌に落ちた。余は彼の此單純なる靈魂の叫びを以て地軸の轉傾にも勝るの大事件と信じ、祈つて余の信仰の全幅を傾けて彼の要求質疑に應じた。爾來文書の往復幾十回、彼は余の拙文を唯一の指針として日々聖書の深林に分け入り行く々々神を仰ぎ罪過を認めキリストを信じ十字架に縋るの靈界の正道を順序よく踐んで聖靈の愛護の下に見る間に福音の眞髓に達するの榮譽を蒙つた。雨漏り蚯蚓匍ふ濡疊に起臥して鮮血を吐き自炊の粗食に痛く胃腸を損しつゝも私は幸福の極みと常に感謝致しますと其心底を告白し來るに遭ふて余は神の御名を讚美するの外は無かつた。最近

### コップ涼しオレンジ色の今朝の爽

の一句に信仰的樂天を歌つて遂に八月廿五日輝きの國へと宿りを移された。救は臨めり日本國に臨めり、國の頭胴脚の差別なく十字架の恩恵に生き還らんとす感謝々々

## 『聖書之言』創刊

神の特命は石原兵永氏に降つた。

假令我は迂なり拙なり任に耐へずといふとも辭すること  
は出来ない。懼るゝ勿れ我汝と俱にありとの御聲を畏み  
て獨ベンを握つて神の聖書の爲に起つた。曩きに聖書之  
研究の編輯に當り又公職の身に輕装を與へられし事など  
を回想し見て準備は既に遠き過去より聖手に存すること  
を知つた。今や謙順を纏ふ其創刊號に接して天意を齎す  
鳩を掌にするの感がある。鐵と銅と鉛と爆藥とを以て造  
られし器物が此處彼處に堆きを眺めて心を痛むる余は、  
此生命を傳ふる天資の武具の新たに日本民族の上に加へ  
らるゝを見るに及んで衷心より主の恩寵を感謝すると共  
に主幹の健在を祈り又併せて試験の岐路に立つ我が同胞  
が之を便りに贖罪更生の恩恵に預るに至らんことを切に  
祈るものである。

エレミヤ記の研究を取纏め近く出版することとしたため、本誌掲載は中止する。以下只項目だけを掲げ置く。

エレミヤの孤獨

エレミヤの悲哀

セデキヤ王時代

二籠の無花果の幻（患難と新希望）

流囚への書翰（政治の根本方針と宗教）

絶對非戰

眞の預言者と偽の預言者（信仰と理論）

生命の道と死の道（正義と愛國）

契約違反（國際及び社會正義）

入牢（エレミヤの苦難）

國土回復のしるし（國土と宗教）

七 國 後

暴風後の新希望（田園の平和）

新約の大預言（聖社會の基礎）

ミツバの晩秋（建設と破壊）

エレミヤの最後（殉教の意義）

## 身邊漫筆

○本誌が滿五年の今日まで存続し得たことは私には不思議である。若し數は餘り多くはないが、心からなる友の厚意がなかつたならば到底今日ある事は出来なかつたであらうと、私は前月號に書いた。

○是について先づ第一に感謝しなければならぬのは、田中良雄君であることは、屢々書いた。此の人なかりせば、私は他に何か別の仕事をして居て、本誌はなかつたであらうと思ふ。私が雑誌創刊を企て先づ彼に相談したそして眞先心からなる賛同を得た。彼の賛同は口だけでなく實行を伴つた。彼はわざわざ大阪から上京し、私を訪れ毎月百部購求を約した。其れ以後度々深厚の同情を寄せ、私を勵まし、陰に陽に常に私の仕事を援けてくれて居るのである。彼のなした種々なる善事の一端を窺知した者は何人も、彼のハートの温いのに驚嘆して居る。私自身彼の前に己の小なることを感ぜずには居られない。

○本誌は他に何を爲し得ずとも、こう云ふ人があり、こう云ふ人の共同事業である事を證せばそれで足りるのである。私は本誌を以て

私の事業とは思はない。之は友人との合作であると思ふ。最近北澤敬二郎、三村起一、河井昇三郎の三君が田中君と一緒になつて非常の厚意を本誌に寄せ、私を援けて居る。有つべき者は金にあらず、友である。

○私は基督教界に殆ど其の名を知られずして基督教雑誌を出したのである。若し内村先生が聖書之研究誌に之が廣告を許し、自ら筆を執つて之が紹介の短辭を掲げて下さらなかつたならば、多分研究誌讀者には知られずしてすんだであらう。先生が度々私を激勵された恩は忘れることが出来ない。

○次にいつも渝らぬ友愛を以て雑誌に伴ふ面倒な仕事を見てくれるのは田村次郎君である此の人がなければ、私は鎌倉の場末、悪七兵衛景清が幽閉された土窟の隣から一度も上京しないで、「雑誌業」をやることが出来ない。其の他まだまだ澤山の人が蔭から援けて此の雑誌は發行されて居る。其の名を掲げることには遠慮しやう。但し私は一度も一握の銀のため人に醜關係を結んだ事はない。

○最後に獨立堂書房の主人についてだけ語る事を許して頂く。私が同君に本誌の大賣捌を依頼し、全幅の信頼をして居るのは、同君の

義侠心に感じたからである。彼の俠骨は今から三十餘年の昔、内村先生が萬朝報の主筆となり、破邪顯正の論を以て世を覺醒して居られた頃、信州の片田舎で車夫をして居た彼は百里の道を遠しとせず、車を挽いて上京し先生を訪れ、車夫となつて先生を援けやうと懇望した時から毫も失はれて居ない。爾來彼は忠實に先生に仕へた。先生も先生であつたから此の驛馬を御し、彼も彼であつたから心から先生に參つた。先生逝去後はその邸附近に一書店を開き、傍先生なき跡の雜事を手傳つて居る。彼の唯一の残念は、先生が「音吉に抱かれて死」なかつたことである。最近彼の書店は素晴らしい景氣を出して居るのは私としても大に愉快を感じる。本誌は彼の厚意に由つて大分地方の舊研究誌讀者に廣まつた。

○本誌連載のエレミヤは完結までに尙一年餘を要するので之を中止し、近く岩波書店から出版することになつた。既載分は主としてエレミヤの詩であつたが、未載分はイエスに最も似たと云はれる舊約中の最大人物たる彼の傳記である。私は宗教が國家にどう云ふ深い關係があるかについて彼の生涯と預言から多くの事を學んだ。

近刊豫告 (十二月出版豫定)

江原萬里著

宗教と國家

エレミヤ記の研究

定價及び送料未定  
スキントナーの名著「豫言と宗教、エレミヤ傳研究」と稍視角を異にし、エレミヤの他の一面を中心として書いたものである。

發行所 東京神田 岩波書店

シュワイチエル原著  
醫學士 野村實譯

水と原生林とのほざまにて

原著者は嘗てイエス傳研究を著し、歐米の學者をして聖書を讀み直さした。今は夫人と共にアフリカ内地に入り、數百の土人の醫療をなしつつある。此の書は愛の勞作の手記である。こう云ふ人を出す基督教は決して滅びない。譯文流暢。興味深い書である。

坂野龍雄、同つる代共著

基督教女性觀

定價一〇〇錢

東京市九段坂

向山堂書房

(昭和三年二月十六日)  
第三種郵便物認可

聖書之眞理 第六十一號

毎月一回一日發行

雜誌創刊廣告

主筆 石原兵永 十月創刊

聖書之言

一部一五錢 送料二錢  
半年分 九〇錢 ナシ  
一年分 一七〇錢 ナシ

石原君は内村先生に長く師事し、最も多くの先生の薫陶を受けた一人であり、先生逝去の際嗚咽された一人である。創刊號中の信仰の再吟味は、主筆の今後言はんとするとこの要領を端的に發表してある。之を讀んで私と思想的に最も親しい感がある。本誌愛讀者は多分此の雜誌を愛讀せられるであらう。

發行所 東京市杉並區井荻町上萩窪二九五  
振替東京四七五九七番

星野香澄著

靈閃餘錄

定價 六〇錢 送料 六錢  
著者の眞剣さがよく顯はれて居る。之は眞摯な靈魂の神に呻く聲である。

大屋左一著

歴史的に見たる舊約聖書

定價一二〇錢 送料一二錢

野邊地天馬著

うるはしの朝  
定價 八〇錢 送料 八錢  
名古屋市流川町一八  
一粒社書房

聖書の眞理定價 (送料共)

一 部 二 十 錢  
半年(六部) 一 十 錢  
一年(十二部) 二 十 錢  
海外一年 二 四 十 錢  
拂込は聖書の眞理社 (振替東京六三三七五番) へ。獨立堂にてもよし

昭和六年度合本

定價共 二 四 十 錢  
總クロス製 残り少々あり  
昭和七年十月三十日 印刷納本  
昭和七年十一月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三三四三  
編輯印刷 江 原 萬 里  
發行人

東京市澁谷區向山町九七  
發行所 聖書の眞理社

東京市神田區三河町三ノ四  
印刷所 今井印刷所

東京市淀橋區柏木九四六  
發行所 獨立堂書房  
振替東京二九四六番

本誌定價二十錢